

第三十八回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

日比 嘉高 著『帝国の書店 ―書物が編んだ近代日本の知のネットワーク』

(2025年8月7日刊 岩波書店)

日比 嘉高 (ひび・よしたか)

名古屋大学大学院人文学研究科教授

1972年(昭和47年)11月25日生まれ 53歳 愛知県名古屋市出身

専門は、近現代日本文学・文化論、出版文化史、デジタル・ヒューマニティーズ

1995年3月、金沢大学文学部、卒業。2001年3月、筑波大学大学院文芸・言語研究科、修了。博士(文学)取得。2001年4月、筑波大学文芸・言語学系、助手。2002年5月、University of California, Los Angeles, Center for Japanese Studies (U.S.A.) Visiting Scholar。2004年4月、京都教育大学教育学部、専任講師。のちに、助教授(2006年)、准教授(2007年)。2009年3月、University of Washington, Department of Asian Languages and Literature (U.S.A.) Resident Scholar。2009年4月、名古屋大学大学院人文学研究科、准教授。のちに、教授(2021年。現在に至る)。2016年6月、日本移民学会 理事(～2022年)。韓国日本文学会 海外理事(2023年～2025年)。日本学術会議 連携会員(2023年～現在)。日本近代文学会 理事(2024年～現在)。

主著に『プライベートの誕生 モデル小説のトラブル史』(新曜社、2020年)、『文学の歴史をどう書き直すのか 二〇世紀日本の小説・空間・メディア』(笠間書院、2016年)、『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学、出版文化、収容所』(新曜社、2014年)、『〈自己表象〉の文学史 自分を書く小説の登場』(翰林書房、2002年)。この他、『疫病と日本文学』(編著、三弥井書、2021年)、『「ポスト真実」の時代』(津田大介氏との共著、祥伝社、2017年)、『いま、大学で何が起きているのか』(ひつじ書房、2015年)など。

受賞のことば

町の本屋がどんどんと姿を消していく時代に、本屋をめぐる書籍で賞を賜ることになりました。『帝国の書店』は、植民地支配や移民送出をとまなう日本の近代の歩みの中で現れた、台湾や朝鮮、満洲、中国、樺太、北南米、南方における小売書店、そしてその店に本や雑誌を運んだ取次業者の歴史を追ったものです。個別の書店について掘り下げて調査すると同時に、環太平洋を駆けめぐった書物のネットワーク全体を俯瞰するよう心がけました。研究の過程では、可能な限りかつて書店があった海外の町に足を運び、跡を訪ねました。調査と出版にあたって、多くの方々に助けていただきました。今回幸運にも、和辻哲郎文化賞という輝かしい歴史をもつ賞を受賞することができました。私の研究プロジェクトを支えて下さったすべての人と共にこの受賞の喜びをわかちあい、本と本屋を愛する多くの人たちにもこれを祝っていただければ幸いです。

情熱の芯

ページを開くと、先ずインド大陸を底辺部にして、北へ向かって日本列島からカムチャツカ半島、その先までを収めた地球儀の写真が目飛び込んで来る。中央に中国大陸、右手前からインドシナ半島、南洋諸島、フィリピン、台湾、細くたおやかな日本列島、左手前からチベット、モンゴル、シベリア、その果て、裏側にある筈の遙かなサンフランシスコ、さらにサンパウロ、ブエノスアイレスまでが小さく微かに捉えられている。これらの途方もなく広大な空間の中、至るところに日本の書店、取次業者の名が記されている。まさに本書のタイトルを地球儀の中に具現化した圧巻の一ページである。

更に圧巻なのは、この半地球儀＝日本帝国（主義）の版図あるいは移民地域に広がった書店と取次の盛衰を、膨大な資料の検索と踏査、検証から描出された二十世紀前半の「知のユニバース」のパノラマである。我々は従来、日本帝国主義の負の遺産を背負うことで、歴史的思考を繰り返して来た。しかし、人間にも物事にも、ましてや歴史にも必ず両側面がある。一面にダイヤモンドのように輝く「知」のネットワークの形成があった。「知」は本として「外地」に運ばれた。「知」は権力を構成する一方、支配への抵抗の糧となった。

本書はこの「物流」と「知」のネットワークを正確に描くことで複数言語、複数民族の〈接触領域〉としての世界を的確に捉えて、時に抽象的過ぎたアンリ・ルフェーブルの「空間の生産」や、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」の理論と思想を、極めて具体的に、分りやすく展開してみせる。

日本の敗戦、日本帝国主義の敗退が、冒頭に引いた地球儀の世界に何をもたらしたか。歴史の逆説、アイロニーとも言うべきか。日本は滅びることによって、〈知の接触領域〉を残した。〈知の接触領域〉とは具体的に何か？「図書館」である。小売書店を生業にして来た上海の内山完造が敗戦を見つめて夢見たのは、「戦後の世界に日本文化を大陸に存する事は未だ考へられて居らん事である。蘇州の図書館は先づ内山個人の書物と店員全部のものを買い取って、又他の人々からも買い取って小規模の図書館を開らき、内山夫婦は蘇州図書館に住む事」（完造「雑記」）だった。

末尾近くに置かれたさりげない引用だが、ここに本書の執筆を著者に促した情熱の芯がありそうだ。

思いつきそうで思いつかない本

日本の帝国勢力圏の特質を批判的に再構成する方法として、まことに斬新ながら、確かにこの手法もありだな、と誰をもうならせる書物の誕生である。確かに、誰でも思いつきそうで思いつかない本であ

る。同時に、誰でも書けそうでいて書けない書物でもある。

日比嘉高氏の『帝国の書店』（岩波書店）は、朝鮮や台湾や満州だけでなく、北南米・樺太・南洋にまで広がった日本人の生活共同体で日本文化を支えた書店や、そこに本を運んだ取次業者の物語である。さらに、他の民族ながら日本語を理解できた人をはじめ外地の読者、内地の豊かな出版文化から切り離された日本人がいかにして、読書にあこがれ、新しい知恵や情報を入手しようとしたのだろうか。著者の日比氏は、読者と書店を結び付けた戦前の濃密な文化共同体を、綿密な文献調査や聞き取りを通して素描した。

1920年代になると台湾から日本へ留学した人は、年間 2000 人を超えるまでになった。台湾有数の本屋、新高堂とライヴァル店博文堂などは内地書店の本揃えとほとんど変わりなく、日本支配の具となる本と並んで、日本に抵抗する知の拠り所となる本を誰にも差別なく提供した。南樺太では 1942 年現在 97 軒の本屋があったという。この北辺では札幌の老舗富貴堂の影響力が強く、他店はなかなか喰いこめなかった。こうした地域独自の本屋事情なども織りこめられており、その地域の本屋を知る者にとってはなつかしい情報も多い。

上海の内山書店は、日中双方の文化人が交流したサロンとして知られる。店主・内山完造は彼らの活動を陰に陽に支えた篤志家でもあった。出版から販売まで手広く商売した大書店の内山は、租界なるがゆえに、中国で発禁になった中国語の左翼出版物も扱っていた。童話会を通して日中の児童の啓発にも貢献している。いまの厳しい日中関係をみる時、若い世代には内山のような偉人もいたことを是非知ってほしい。似たような逸話は他の植民地や居留地にもある。

着想の妙といい、スケールの大きさといい、和辻哲郎文化賞にふさわしい労作である。

ロバート キャンベル

現在、電子書籍やネット通販の普及により、駅前の書店は 1 日に約 1 店舗のペースで減少が続いている。過去 20 年で半数以下（約 1 万 900 店）に激減しており、2024 年時点で約 28%の市区町村には書店がなく、地域密着型の老舗店も廃業に追い込まれるなど物理的な「本との出会いの場」が失われつつある。人気小説家がそれにブレーキをかけようと、地方の駅中に自ら書店を開業するような状況が今日の日本にはある。

本書が示すように、戦前、国内はもちろんのこと、日本の移植民地や居留地などには日本で印刷された雑誌や教科書、一般図書などを販売する本屋が数多く存在していた。著者が波に例える外地へと運ばれ販売する日本語書籍は、19 世紀末から海外へ進出（侵出）する日本人および日本国の軌跡をなぞるように、世界各地に日本語で書かれた知を拡散させた。知見と感性の拡散に加え、日本人と現地の住民が出会って何がしかの交流を持つきっかけともなった模様を本書は浮かび上がらせている。

外地書店と書物取次を通路として、戦前の大日本帝国における人とモノと知が織り成す文化的機構

を精緻に検証することで、ワールド・ヒストリーへの新たな基軸を立てることに成功していると言えよう。

帝国が版図を広げるにしたがってその統治を助けると同時に、書店という近代特有のインフラが外地に移住する日本人の拠り所となっていく一方、台湾を振り出しに朝鮮半島、満州から北京や上海などといった各拠点で起業された日本人書店の競争は書籍雑誌商組合など互助的組織を生み出し、民間企業がたどる戦中から敗戦までの過程を如実に表している。最後に、1945年夏に終焉を迎える帝国外地の書店は、敗戦国の国民がそれぞれの地域で直面する混乱を新たな角度で炙り出す。引揚げ報告書などに見る日本人従業員を帰国させる計画と、現地社員が取り組もうとする活動には、焦点が従来当てられてこなかった歴史の重要な側面が見えてくる。新知見と複数の視座を読者に与える本書は、誠実に書かれた秀逸の学術書である。